第 45 回 「十年一日」の解釈

今夏は長期間猛暑が続き、秋の到来が明確に感じられなかったばかりか、例年に比べて自宅近隣にもみられるような秋特有な美しい風景の記憶も希薄である。自家の北側の道路を隔てた向かい側の家の前庭にある柿の木は陽当たりがよいためか今年も多くの実をつけたが、自庭の東北にあたるところに植えてある柿の木には陽当たりが悪いためもあるが、今年も全く実が生らなかった。

そんななかで、金木犀だけは例年よりも十日ほど遅かったものの十月一日に突然という感じで花をつけた。金木犀は独特な芳香とともに一斉に花咲くので季節感がはっきりしている。また、庭に 37 年前に亡くなった父の形見として残っている中型雑木盆栽の欅は、春の鮮やかな緑から晩秋の赤茶けた葉色まで季節の移ろいを感じさせ、いつものように風情がある。

立冬近い十月末の休日、胸部外科の大先達である故早田義博先生とのお別れ会のため上京してきた。先生は東京医科大学外科助教授の頃、日本で初めてヒトでの肺葉移植を行われたが、教授になられてからも呼吸器外科とくに肺癌外科に関する新しい研究業績を次々とあげられ、世界的にも最も著名な呼吸器外科医のひとりであった。豪快かつ繊細なお人柄の先生は、十数年年下の私にも目をかけてくださり、学会関係以外の所でも大変お世話になった。心から先生のご冥福をお祈りする。

早田先生との数々の思い出の中で最も鮮明に残っているのは、1979 年 11 月インドのポンペイでの第 6 回アジア太平洋胸部疾患会議（VI APCDC; Asia-Pacific Congress on Diseases of the Chest）の後、先生に連れられて呼吸器外科医が大挙してネパールのカトマンズからヒマラヤに行き、エベレストビューホテルに宿泊した時のことである。

ポンペイでは筆者も「Hemodynamic activities following bilateral lung auto- and allotransplantation in dog」という肺移植実験の論文を発表し、その学会がアメリカ胸部医学会（ACCP; American College of Chest Physicians and Surgeons）の分科会となっていることから、筆者はポンペイで会長から ACCP 正会員証を授与され、それ以来現在も ACCP 正会員である。

早田先生はそれまでも永年に亘ってネパールの医療に貢献されており、空港には先生をお迎えするべくネパール王族の方々がみえておられたのに驚いたものである。

当時日本人の富原氏経営のエベレストビューホテルまでは、ピラタスポーター機で標高3,600m のシャンポジェというところまで行き、そこから 200m ほど登る 1 時間ほどのトレッキングでたどり着いた。飛行機が山の上り斜面のような狭い滑走路に着陸するのに驚いたが、その時のスイス人のパイロットはその後航空事故で亡くなったと聞いた。

ポンペイから着いた翌日、標高 1,300m のカトマンズから一気に富士山位の標高 3,800m 位のところまで登るため、高山病の危険があった。同伴した筆者の連れ合いは 200m 程度登る数キロメートルくらいのトレッキングではふわっとした気分になってよかったといっているが、同行者の中にはホテルに到着した途端に意識を失って倒れる方が何人かおられた。その中のご婦人のひとりの近くにいた筆者は思わず走り寄って倒れないように抱き留めるという運動をしたため、直後からひどい頭痛に襲われ、そのため夕食に出たヤクのステーキを試すことができなかった。高山では運動と入浴は厳禁であるが、その時のステーキを食べられなかった残念さは今もって記憶に新しい。

翌朝ホテルからのヒマラヤ山系の一部のエベレスト(8,850m)、ローチェ(8,511m)、アマ・ダムラム(6,812m)など朝日を浴びた山々の絶景は今もって鮮明に思い浮かぶ。カトマンズからはネパール南部の保養地ポカラにも行ったが、そこからはサウスピーク(7,273m)、アンナプルナ(第 1 峰 8,091、第 2 峰 7,937m、第 3 峰 7,537m、第 4 峰 7,525m)、ガンガプルナ(7,454m)、ダウラギリ(8,167m)、マチャプチャレ(6,933m)、マナスル(8,163m)などの山々が眺望された。今後恐らくヒマラヤ旅行の機会は巡ってくることはないであろうと考えると、33 年前のその経験記憶は益々大切になる。

最近筆者には以前にも増して時が過ぎるのが速く感じられるが、時の流れが速いことを意味する言葉のひとつに「十年一日」という言葉がある。これは大辞林(三省堂)の解説では「長い期間変わることなく同じ状態であること」である。

筆者はこの言葉を数十年来「十年一日のごとく研究を続ける。十年一日のごとく人を想う。」などのように自分なりに積極的な感覚のもとに大切にしてきた。しかしながら一般的には「十年一日のごとく平凡な生活がつづく・同じ状態が続き、何の変化もないようす・同じ状態が続き、少しの変化もない様子・たとえば十年一日のように同じようにつまらない講義をする・旧態依然という類義語がある」などと、むしろ消極的な意味で使われることが多いと解説されている。

新しい目的に向かって一目散に生きる者にとって十年一日のごとく根気よく研鑽することは、その目的達成条件のひとつであるし、未知の科学分野に入り込んだものにはとくに必要なことであると思う。そのような環境条件の中に身を置くならば運もまた味方になってくれると思うほどである。

思い起こせば筆者がこの言葉に出会ったのは今から半世紀前の医学生時代であり、それ以来常識として身についてしまい、最近までわざわざ辞書で調べてみることはなかったのである。

筆者は今後も「十年一日」は前向きな意味合いで使っていきたいし、将来の目的をもつ若者は、それを完遂するためにこの言葉が筆者のいうような意味をもつことを是非心に留めておいてほしいと思う。

33 年前に撮ったヒマラヤの山々の写真を前にして本文を書き終える。